『妖精の女王』と『楽園の喪失』における冶金

水野眞理

1. 叙事詩と戦争

叙事詩をどう楽しむか？という本シンポジウムのテーマを踏まえ、まず叙事詩の概念を整理する。*OED* は、形容詞の epic を、一人または複数の英雄的人物の事績を語る、と定義し、名詞の epic を、そのような特性を有する詩作品を指し、さらに国家（民族）の過去の記念すべき歴史や事件を語るもの、と付加している。

ホメーロスの『イーリアス』とウェルギリウスの『アエネーイス』は、英雄の事績として国家や民族の存亡のかかる戦争を扱っている。しかし、叙事詩は必ずしも戦争を扱うわけではない。同じホメーロスの『オデュッセイア』は戦後の物語であり、スペンサーの『妖精の女王』もアレゴリカルな騎士の冒険を歌うが共同体の運命がかかる戦争は描かれていない。ミルトンの『楽園の喪失』は神と反逆天使の戦争を扱うが、リアルタイムでそれを描く代わりに、天使ラファエルによる回想の形をとっている。また『楽園の喪失』は、一人の英雄の事績を歌う作品とは言えない。（セイタンを英雄と見なすのでない限り。）

このように叙事詩には一括りにはできない多様性があるのだが、叙事詩と呼ばれる作品の多くに共通するのは、先行する叙事詩の伝統への意識が明確に示されることである。叙事詩を書く詩人は、叙事詩の伝統を継ぐ者としての自己をアピールするのだが、本報告では、『妖精の女王』(1590)と『楽園の喪失』(1667, 1674)の詩人たちが、伝統を継承する身振りをすることによって、却って作品に綻びを作ってしまっていることを指摘する。

2. 叙事詩における冶金－『妖精の女王』の場合

『妖精の女王』第 2 巻第 7 歌 35-36 連は、この巻を代表する騎士ガイアンが富の神マモンに誘われて地下の館を訪れ、黄金製錬工房を見るエピソードを語る。そこは 100 ものコンロ、100 もの溶鉱炉の各々に醜悪な悪鬼が張り付いて製錬作業を行っていた。巨大なふいごで風を送って火を起こす、鉄のやっとこで火の消えかかった薪を置き直す、水をかけて火勢を調整する、鉱滓を掬う、溶けた鉱石を掻きまわす、といった冶金の作業工程が具体的に語られる。

冶金の場面を描くことは、叙事詩の先行作品に例があり、スペンサーはここであからさまに文学的コンヴェンションに従う身振りをしているのである。例えば『イーリアス』の終盤近く、英雄アキレウスの母、女神テティスの依頼によって鍛冶の神ヘーパイストスが盾を製作する中で、鍛冶の作業――ふいごによる送風、火中への金属の投入、金槌とやっとこでの鍛造――が語られる。完成した盾の表面の文様の描写は W. H. オーデンの詩『アキレウスの盾』に再話されたこともあり、エクフラシスの典型として注目されるが、冶金もまた叙事詩を歌う上で踏襲すべきトポスであったことは看過されがちである。ウェルギリウスもこれを踏襲して『アエネーイス』において冶金の場面――アエネーアスの母、女神ウェヌスの頼みをきいた鍛冶の神ウルカーヌスの手下が青銅、黄金、鉄を熔解し、ふいごによる送風、製錬、鍛造を行う作業――を歌っている。これら古典作品における冶金の描写が、マモンの地下空間における黄金生産の場面を描くスペンサーの念頭にあったことは疑いえない。

しかし、スペンサーは単に伝統をなぞるにとどまらず、『妖精の女王』の寓意のために、冶金の場面にガイアンに対する「誘惑」という要素を付け加えた。マモンは黄金の社会的影響力を誇示し、ガイアンの金銭欲や名誉欲を刺激しようとする。この冶金の場面のあと、ガイアンはさらに地下を進み、その奥で欲に溺れた人間に下される劫罰を見せられる。これもまた、明らかにホメーロスが『オデュッセイア』、『アエネーイス』で、ダンテが『神曲』（地獄篇）で描いた劫罰の場面に匹敵するものを自作にはめ込もうとした結果である。しかし、マモンが「誘惑」を完遂するためには、欲に溺れた者が罰せられる場面を見せるのは逆効果であり、実際ガイアンは欲を出すどころか、疲労困憊して倒れてしまう。スペンサーはホメーロス以来の地獄めぐりという叙事詩的伝統に身を置きたいがために、エピソード本来の目的に反する流れをテクストに持ち込んで綻びを生じてしまっているのだ。『妖精の女王』が属するロマンスというジャンルでは話の整合性は重視されないとはいうものの、地獄の光景に続く、暑く騒がしい黄金工房見学、誘惑、劫罰の場面、という脈絡のない展開は、我々の心の奥にある欲望と恐怖が見せる悪夢そのものであろう。

3. 叙事詩における冶金－『楽園の喪失』の場合

『楽園の喪失』第 1 巻 670-715 行は、神に反逆して天より落とされた天使たちが、セイタンの飛ばす檄を受けて黄金生産を行うエピソードを語る。そこでは、鉱石が生ずるところから、それを採掘し、溶融し、型に流し込んで

何らかの製品にするまでが述べられる。ミルトンもまたホメーロス以来の、とりわけ直前の英語圏の詩人スペンサーの叙事詩テクストを参照し、カバーし、叙事詩人としての認知を求めたのである。

まず堕天使の一隊が、マモンの指揮のもと火山の山腹を掘削して金鉱石を取り出す。（のちの人間もマモンに教えられて大地を掘るようになる、とも語られる。）作業にあたる堕天使たちは、武器でなく鋤と鶴嘴で土木作業を行い塹壕や土塁を作る、軍隊の中では低い階級の工兵（pioneers）に例えられる。黄金生産は卑しい作業なのである。第二の隊は複数の炉を用いて金鉱石を溶融し鉱滓を分離している。この燃料として、『妖精の女王』の対応する場面では 16 世紀当時の通常の材料である薪が用いられていたのに対し、『楽園の喪失』では、木も生えていない地獄という環境で、湖から液状の火を引いてくることになっている。この湖とは、これに先立つ作品冒頭近くで、天使たちが落ちてきたところの「燃える湖」のことであり、「炎を上げる溶鉱炉」に例えられていた場所である。堕天使たちの冶金作業は、セイタンの反撃作戦の一部と見えて、実は堕天使たち自身の状況を懸命に再現していることになる。第三隊の任務は溶けた黄金を型に流し込んで製品にすることである。複数の型に黄金が流れ込む様は、一つの送風装置から多くの管に空気が送られるパイプオルガンに例えられ、その比喩が、音楽のイメージを導きだし、次に語られる堕天使の拠点、万魔殿の出現の BGM につながっていく。

『妖精の女王』と『楽園の喪失』の冶金の場面のもう一つの共通点は、黄金が堕落した時代の産物だという観念である。ルネサンスのヨーロッパでよく知られていたヘーシオドスの『仕事と日』およびオウィディウスの『変身物語』は、文明を黄金時代からしだいに堕落して鉄の時代へと至る流れとしてとらえており、そのトポスが上記二つの叙事詩をも支配している。黄金時代には黄金そのものは存在せず、時代が下がって人間が堕落するに従い、欲望の具現化として黄金が姿を現すのである。スペンサーもミルトンもこれを踏襲し、鉱物の採掘を、母なる大地の胎（はら）を傷つける不敬の行為ととらえている。神がアダムの脇腹から肋骨(rib)を取り出したように、堕天使たちも山腹に大きな傷をつけて鉱脈（rib）を掘り出すのだ。

『妖精の女王』と『楽園の喪失』の冶金の場面にはこのように多くの共通点があるが、文脈上の相違は無視できない。前者における黄金工房見学は主人公の騎士に対する誘惑の必要から書かれたものであった。いっぽう後者における黄金生産はセイタンの神への反撃の第一段階となっている。しかし、なぜここで堕天使たちに黄金が必要なのだろうか？　少なくとも、まだ人間は登場しておらず、誘惑という目的はありえない。また、ここで作られる黄金製品がどう使われるのかは語られない。直後に語られる万魔殿はマルシバーの設計によって超自然的に、吐く息のように出現するのであって、堕天使が金属その他の材料を用いて建設するのでもない。[1]

結局、『楽園の喪失』におけるこの目的不明な黄金生産は、ミルトンがスペンサー同様、叙事詩の伝統に従って冶金の場面、および堕落の文明史観をテクストに取り入れた結果とみることができる。しかし、この無意味な作業に、我々は皮肉な意味を見出すこともできる。すなわち、黄金は神の創造物であり天国にはいくらでもあるのだが、それを地獄で生み出すためには重労働が必要であることを示しているからである。堕天使たちは全てを失い、全てを自らの手で作り出さなければならない。「創造」は神の属性ともいうべき行為であり、神以外のものが何かを作り出すことは、神の創造の模倣を、労苦をともなって行うことに他ならない。堕天使の部隊が、本来天使に求められるはずのない肉体労働に従事する様は、哀れとも滑稽とも見える。その延長線上には、額に汗して、生存に必要なものを―そして自らを害するものをも―作り出す人間の悲哀と愚行が予言されているともいえよう。またそれは火の湖で身を焼かれる堕天使ら自身の状況のパロディでもあるのだ。『楽園の喪失』の特徴の一つは、壮大なスケールの語りの中で、神と堕天使、堕天使と人間、そして神と人間とが重層的にパロディとなっていることだと考えられるが、冶金の場面はその一例といえるのではないだろうか。

参考文献

Baldwin, Anna, ed. *John Milton: Paradise Lost Books 1and 2*. Oxford: OUP, 2009.

Delbeke, Maarten. “An Unstable Sublime: Milton’s Pandemonium and the Baldacchino at St. Peter’s in Rome.” *Lias*, vol. 43, no. 2, 2016, pp. 281-96.

Milton, John. *Paradise Lost*. Norton Critical Edition. Ed. Gordon Teskey. New York: Norton, 2005.

Nicolson, Marjorie Hope. *A Reader’s Guide to John Milton*. Syracuse UP, 1998.

Smith, Rebecca W. “The Source of Milton’s Pandemonium.” *Modern Philology*, vol. 29, no. 2, 1931, pp. 187-98.

Spenser, Edmund.　*The Faerie Queene Book Two*. Ed. Erik Gray.　Indianapolis, IN: Hackett, 2006.

[1]ただし Nicolson はここで作られる黄金を万魔殿の建材と解している。（196）